

山の雪

高村光太郎

わたしは雪が大好きで、雪がふつてくるとおもてにとび出し、あたまから雪を白くかぶるのがおもしろくてたまらない。

わたしは日本の北の方、岩手県の山の中にすんでるので、十一月ごろからそろそろ雪のふるのを見ることができ、十二月末にはもういちめんにまつしろになつたけしきをまいにち見る。このへんでは、平均一米ートルくらいしかつもらないけれども、小屋の北がわでは屋根までとどき、地めんのくぼみなどでは人間の胸くらいまでつもる。

わたしの小屋は村の人たちのすんでいるところから

四百メートルほど山の方にはなれていて、まわりに一けんも家はなく、林や野はらや、少しばかりの畑などがあるだけで、雪がつもるとどちらを見てもまつしろな雪ばかりになり、人っこひとり見えない。むろん人のこえもきこえず、あるく音もきこえない。小屋の中にすわっていると、雪のふるのは雨のように音をたてないから、世界じゅうがしずかにしんとしてしまつて、つんぽになつたような気がするくらいだが、いろいろでもえる薪がときどきぱちぱちいたり、やかんの湯のわく音がかすかにきこえてくる。そういう日が三ヶ月もつづく。

一メートルくらいつもった雪はあるきにくいから人も小屋にたずねてこない。あけてもくれてもひとりいろいろに火をもしながら、食事をしたり、本をよんだり、仕事をしたりしているが、そんなにながくひとりであるとなんだか人にあいたくなる。人でなくてもいいから何か生きているものにあいたくなる。鳥でもけだものでもいいからくればいいとおもう。

そういう時にわたしをよろこばせるのは山のキツツキだ。キツツキは夏はこないが、秋のころから冬にかけてこのへんにすんでいてときどき小屋をつつきにくる。小屋のそとの柱や、棒ぐいや、つんである薪など

をつついて中にいる虫をたべるらしい。その音がなかなか大きく、こつこつこつこつとせつかちにきこえる。まるでお客がノックするような感じで、おもわず返事がしたくなる。つつく場所によつてとんとんとんとともにきこえ、しばらくすると大きな羽音をさせて又べつの柱にゆく。虫がいましたかときいてみようとしているうちに、キョツというような小さな鳴きこえを出してとんでいってしまう。小屋の前にある栗の木のみきをしきりにたたいているのを見ると、頭のすこし赤いアオゲラというキツツキや、白いぶちが黒い羽についていて腹の赤いアカゲラというのが多いようだ。キ

ツツキのほかには何の小鳥か、朝はやくや、夕方うすぐらくなるころ、のきしたにつるしてあるいろいろの青ものの実や、草の実をついばみにくる小鳥がいる。朝まだねている時、障子のそとでとびまわるその羽の音が、まるで枕もとでとんでいるように近くきこえる。なんだかかわゆらしい。わたしは小鳥におこされて、目をこすりながらおきあがる。キジやヤマドリは秋には多く見かけるが雪がふるとあまりこない。遠くの沼にはカモがおりて鳴きごえだけがよくきこえる。

生きものといえば、夜になるとネズミがくる。ジネズミというのか、ハツカネズミか、ふつうのイエネズ

ミよりも小さくて、人をおそれないネズミがはるばる雪の上を遠くからかよってくる。わたしの坐っているまわりをはしりながら、たたみにこぼれているものをひろってたべる。紙につつんでわきにおいてあるパンをたべようとして紙をくわえてひっばる。わたしが手でたたみをたたくとびっくりしたような顔をして、とんぼがえりをして又ひっばる。こんなに人なつこいと、アンツウでころす気にもなれない。このネズミは朝はどこかへかえっていつて夜だけくる。

山のけものは多く夜の間に出現する。朝になつてみると、いちめんの白い雪の上にたくさんその足あと

がのこっている。いちばん多いのはヤマウサギの足あとで、これはだれにでもすぐわかる。いなかですんでいた人は知っているだろうが、ウサギの足あととは、ほかのけもののとちがって、おもしろい形をしている。ちようどローマ字のTのような形で、前の方によこに二つならんで大きな足あとがあり、そのうしろに、たてに二つの小さな足あとがある。うしろにあるたての小さい二つがウサギの前あしで、前の方にある大きいよこならびの二つがウサギの後あしである。ウサギの後あしは前あしよりも大きく、あるく時、前あしをついて、ぴよんととぶと大きな後あしが、前あしよりも

前の方へ出るのである。このおもしろい足あとが雪の上に曲線をかいてどこまでもつづく。その線がいく本もあちらにもこちらにもある。小屋のそとの井戸のへんまできていることもある。井戸のあたりにおいた青ものや、くだものをたべにきたものと見える。

そのウサギをとりキツネがくる。キツネは小屋のうしろの山の中にすんでいて、夜になるとこのへんまを出てくる。キツネの足あとはいヌのとはちがう。イヌのは足あとが二列にならんでつづいているが、キツネのは一列につづいている。そしてうしろの方へ雪がけつてある。つまり女の人がハイヒールのくつでうま

くあるくように、一直線上をあるく。四本のあしだから、なかなかむずかしいだろうとおもうが、うまい。キツネはおしやれだなあとおもう。じっさい夕日をあびてあるいているところを見ると、毛が金いろに光つて、尾をながくなびかせ、腹の方は白いように見えてきれいである。いちど鳥のようなものをくわえて小屋のまえの畑をあるいていったのを見たが、キツネがあるくと、カラスがいればさわいで鳴くからじきわかる。キツネの口はなかなか力があつて、この秋、ある家の山羊が死んだところ、夜の間キツネがそれをくわえて持って行ってしまったと、その家の人がはなしてい

た。

ウサギや、キツネのほかにも、イタチの足あと、ネズミの足あと、ネコの足あと、みんなちがう。ネズミの足あとなどは、まるでゆうびん切手のミシンの線のようにきれいにこまかく、てんてんてんとつづいて、さいごに小屋のえんの下のところへきている。これは二列になっていて、雪がうしろへけつてない。イタチのも二列。

おもしろいのは人間の足あとで、ゴム靴でも、地下足袋でも、わらぐつでも、あるき方がひとりひとりちがうので、足あとをみると誰があるいたかたいて

いわかる。大またの人、小またの人、よたよたとある人、しゃんしゃんとある人、前のめりの人、そつている人、みなわかる。わたしの靴は十二文という大ききなので、これは村でもほかにないからすぐわかる。ゴム靴のうらのもようでもわかる。あるき方のうまい人や、まずい人があるが、雪の中では小またにこまかくあるく方がくたびれないといわれている。両足をよこにひらいてあるくのがいちばんくたびれるようだ。靴のかかをとまげる人のもくたびれそうだ。これはからのまがつている人、内ぞうのどこかわるい人のだ。いちど、あまり大きな足あとがつづいているので、ク

マかと思っておどろいたら、「がんじき」というものをはいてあるいたあとだった。これは足が深く雪にもぐらないように、靴につけてはく道具である。「つまご」という大きなわらぐつも同じ役目をする。あまり深くてやわらかい雪の上は、立つと足がもぐるので、立つてあるかずに、雪の上をおよぐといいといってくれた人があるが、わたしにはできない。どうやっておよぐのかわからない。

わたしは雪の中をあるくのが好きだが、あるきながら、いろいろの光線で雪を見るとうつくしい。足がふかくもぐるからあるきにくく、くたびれるので、とき

どき雪の中へ腰をうずめてやすむ。眼の前にどこまでもつづく雪の平面を見ると、雪が五色か七色にひかっている時がある。うしろから日光がさすと、きらきらして無数の雪のけっしようがみな光線をはねかえし、スペクトルというものようになる。虹いろにこまかく光るから実にきれいだ。野はらをひろく平らにうずめた雪にも、ちようど沙漠のすなにできるようなさざなみができて、それがほんとの波のように見えるが、光線のうらおもてで、色がちがう。くらい方は青びかりがするし、あかるい方はうすいだいだい色にひかり、雪は白いものとばかり思っていると、こんないろいろ

ろ色があるのでびっくりする。

いちばんきれいなのは夜の雪である。夜でも雪はあかるいから、ほのぼのと何かが見える。そしていちめに白くけむったようになってけしきが昼間とはたいへんちがつてくる。ひろびろと奥ふかくみえて、まるでお伽話とぎずはなしの世界のようになる。きれいはきれいだがい夜の雪みちはあるくとあぶない。眼の前が光って、どこも同じように見えて方角がわからなくなる。わたしも小屋の近くの雪のはらで道にまよったことがある。まいにちあるいている道でも、どこかちがつたところのようにみえ、あるいているうちにへんなところへ

いってしまった。やっと気がついてひきかえして、きんざん小屋をさがしてかえってきた。

しずかな天気の時でもこんなだから、吹雪の夜などにはそとに出られない。昼間でも風がつよいと雪をまきあげて二三間さきも見えなくなる。まるで船がガスにまかれたようになってあるけないし、風がふきつけると息もできなくなる。わずか二三百メートルのところでそんなんすることがあるわけだ。ふぶきの夜は小屋の中にとじこもって、いろりに火をたいて、風の音をきいている。風の音はまるで海の大波のように小屋の屋根の上をのりこして向うの野はらにぶつかる。

うしろの山の遠くから風のくるのがきこえてきて、それの近づく様子は実におそろしいものである。それでもわたしの小屋はうしろに小さな山があるので風がじかにあたらないから助かっている。山がなかったら冬のつよい西風の吹雪にふきとばされてしまうだろう。

雪が屋根の上にあつくつもると重たくなり、そのままにしておく、春が近づいて雨がふった時、水をふくんでますます重くなって小屋がつぶれてしまう。それで一二度は雪おろしをする。大ていクリスマスその後あたりに一度やる。屋根へ上って平たいシャベルで雪をおろすと、窓の前に雪の小山ができる。わたしはい

つも新年には国旗を立てるが、四角な紙にポスターカラーで赤いまんまるをかいて、それを棒のさきにのりではり、窓の前の雪の小山にその棒をさす。まっ白な雪の小山の上の赤い日の丸は実にきれいで、さわやかだ。空が青くはれているとなおさらうつくしい。

底本：「昭和文学全集第4巻」小学館

1989（平成元）年4月1日初版第1刷発行

底本の親本：「高村光太郎全集第10巻」筑摩書房

1958（昭和33）年3月10日初版第1刷発行

入力：kompass

校正：門田裕志

2006年11月20日作成

青空文庫作成ファイル

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。